Osaka University Knowledge Archive

Title	外大時代の回顧
Author(s)	上山, 政義
Citation	大阪外大英米研究. 1988, 16, p. 1-3
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99117
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

外大時代の回顧

上山政義

私が大阪外大短期大学部の専任講師に採用されたのは，昭和34年９月１日のことであった。短期大学部は創設間もない頃であったので，私が短大教官として採用された３人目であった。英語の教官としては第一番目の採用であったので，「英語科主任を命ずる。」という辞令を頂いたが，英語の専任教官は一人であったので，一人で何もかもやらなければならなかった。短大は昭和33年４月の創設であったので，私が主任を命ぜられたときは，すでに３年制の中で第１学年と第２学年が入学しており，１学年の定員が50名であったので，100名の学生の世話をしなければならなかった。しかし，その後逐次教官が増員され，英語科では嶋田昇平先生が第１部から第２部へ配置換えとなり，主任教授に就任された。英語科の教官定員は５人であったので，その後，３人の教官が充員され，短大英語科の陣容はやがて整った。

短大では教員免許状を取得できる制度になっていなかったので，学生諸君には気の毒であった。また，学年進級制度がとられていたので，もし留年と決まると，その学年の英語の全部の単位を取り直さなければならないので，かなり厳しい制度であったと思われる。しかし，短大の学生諸君はよくがんばって勉強し，その上仲よく楽しく勉学に励んだので，卒業の時には相当充実した英語の運用能力をもっていたと思う。

短大が創立されて数年を経た頃から，短大では充分の教育を与えることがむずかしいので，第２部へ移行させてはどうかという意見が出るようになった。その結果，短大教授会では，短大を廃止して第２部を創設するのが適当であるという意見が有力となった。しかし，第２部を創設するのを最終的に決定するのは，短大教授会ではなくて，第１部教授会なので，第１部教授会の諒承を得

るために，小林武三主事，長老としての嶋田昇平教授，教務委員長の小生などが，第1部教授会へ出席して短大で考えている第2部の構想を説明し，結局承認された。これを承けて，小林主事が中心となって第2部創設の計画が推進された。なるべく早期に第2部へ昇格させたいという熱意から，小林主事は大活躍をされ，文部省へ書類を持参する新幹線の車中でも書類の不足のところを書かれたと聞いている。

第2部が創設されることを聞いて，短大の学生諸君は，短大生の中で2部編入を希望する者全員を当該学年に編入させよという要望を短大当局に申し出た。しかし，これは実施が無理なところから短大当局が拒否するところとなり，短大学生諸君はストや研究室との交渉の手段によって要望の実現を計った。結局短大学生諸君の要望は実現されなかったが，止むを得ないことであった。

2部が発足して2年ばかり経た頃から，2部自治会からいろいろな要望が出され，その中で，ゼミを4，5年生のために行ってほしいというのがあった。度々交渉が持たれて，結局ゼミは実施されることになった。ところが，昭和44，45年頃を頂点として所謂大学紛争が全国的に発生し，外大も例外ではなかった。その頃，2部学生諸君が出した要望の中で，政治，経済，歴史をふくむ，社会（又は文化）を言語，文学と並んで三本の柱の一つとせよという項目があった。2部英語研究室では度々会議を開いた末に学生諸君の要望を容れることに決定し，逐次充員して最終的には3名の社会科系教員が迎えられた。これは20を超える外大全学科の中で最先端をきったもので，当初この案を出したときは，他学科の先生方から若干の批判が出たが，結局教授会で諒承していただけたのは有難いことであった。

やがて大学紛争も次第に沈静の傾向を辿り，学園に平和がもどって，教官は教育と研究に専心し，学生諸君は勉強やスポーツその他の本来の学生の在り方にもどれるようになった。学生諸君の勉学の成果は，教員の採用試験に多くの合格者を出し，また就職率が向上することにつながった。

2部英語学科は学生定員が外大随一の多数であり，教官数も多かったので，教官の採用，転任などが他学科より多く，これらのことや，学生諸君の世話な

どで，学科主任はかなり多くの公務に従事せねばならなかった。私が学科主任に就任したのは昭和40年で第２部発足と同時であった。これは嶋田昇平が第２部主事に就任されたためであった。嶋田教授は主事の任期を終えられた後，先生の御都合で，引続き小生が学科主任をやってほしいと依頼されたので，小生は昭和56年の秋まで長年に亘って学科主任をつとめた。ただ，大学紛争の期間の一部分で団交につぐ団交，その他の色々な公的職務の多忙のため，小生が学科主任をすることに対し「ドクター・ストップ」がかかり，医師の方から，「命は大切にしなければなりません。暫らく，どなたかと学科主任を交代してもらって下さい。」という助言があったので，嶋田教授と鵜野清信先生とに交代である期間学科主任を担当していただいた。

昭和56年に学科主任を好田先生に交代していただいたのは，主として家内が脳卒中で倒れ，長期間に亘り，入院生活を送ったためである。好田先生は正木先生とともに，外大在学中から秀才の誉れが高く，立派な学者であり教育者であられ，円滑に学科の運営に当たって下さった。そのうちに好田先生は第２部主事に選出せられたので，今度は正木先生が学科主任を引き受けて下さった。両先生の御尽力で２部英語学科は大いに内容が充実した。そして現在も正木先生が学生主任として御活躍して下さっているのである。

外大でお世話になった30年近い年月を回顧すれば，平沢俊雄初代学長始め各歴代学長や部局長などの役職の方々の暖い御配慮，２部英語学科の先生方始め各先生方の御指導，御鞭撻，事務職員の皆さんの御協力，そして学生諸君の御理解が色々と思い出され，感謝の気持ちで一杯である。

終わりに，第１部と第２部の英語学科の先生方の協力体制が今よりも更に緊密になることを期待するとともに，先生方の御健勝と御多幸を心から御祈りし，外大の英語学科全体が一層発展することを併せて御祈りして拙い文を結ぶことにしたい。